⑵　２期生活動レポート

新村地区担当　　一色　美月

芳川地区担当　　伊藤　実沙子

松本市地域づくりインターンシップ戦略事業に携わって

新村地区担当　　一色　美月

１　新村地区の概要及び地域課題

松本市の中央に位置した新村地区は、人口約３２００人、高齢化率は約３４％で、国道１５８号線と上高地線が東西に横断している田園地帯である。

新村地区の課題は、市街化調整区域のため若い世代の流入が少ない。また、担い手不足や、独居老人の閉じこもりなど、高齢社会の問題がある。

一方、地区の中心に松本大学があり、一人暮らしの学生との繋がりの希薄や、松本大学との連携など、新村地区独自の課題もある。

２　インターンとして取り組んだ事業

⑴　あたらしの郷協議会

平成２７年３月にゆるやかな協議体として「新村地区あたらしの郷協議会」が発足した。この協議会は４つの部会（地域振興、安全安心、いきいき、学びの友）に分かれており、元からある活動を支援したり、新しく事業を始めたりと、住民目線で感じる地域課題に関し、継続的に取り組んでいる。

ア　安全安心部会

地域が安全で、誰もが安心して暮らすことができるよう、主に自主防災について検討している。

新村地区の自主防災組織に防災訓練案の提供を行った。指定避難所である松本大学との橋渡し役として連絡を取り、敷地内での講演会や体験訓練、学生に参加してもらう情報伝達訓練などを企画した。

イ　いきいき部会

高齢者がいきいきと生活ができるよう、居場所づくりとしてサロン化や、認知症を学ぶ講座などを検討している。

サロン化を推進するため、長寿会会長へ長寿会運営の内容やサロン化についてヒアリングを行った。

⑵　福祉ひろば連携事業

平成２９年４月のふれあい健康教室で、嚥下に関する講座を開いた。嚥下機能の説明や、誤嚥を起こす原因に筋力低下をあげ、実際に口や喉のマッサージを行うなど、参加者に関心を持っていただいた。

⑶　CBID 研修

日本障害者リハビリテーション協会発信の「誰一人取り残さない地域社会づくりプロジェクト」として、CBID（地域に根ざしたインクルーシブ開発）の理念に基づいた研修を受け、地域に住む誰もがいきいきと暮らせる社会を作る活動をしている。

研修で学んだ「できることもちよりワークショップ」を、新村地区で開催

した。住民と専門職が、どこにでも起きうる地域課題を事例に意見交換する機会を作った。

３　事業の成果

⑴　あたらしの郷協議会と松本大学の連携として橋渡し役を行ってきた。あたらしの郷協議会には松本大学代表の教職員が所属しているが、地域の細かな要望や、あるいは理想を聞き、大学との調整を行った。

特に防災訓練において、大学生が無線機を持って各町会の一時集合場所に行き、安否確認情報を本部へ報告する情報伝達訓練を行ったことは、高齢者の多い新村地区では有効な手段になることが分かった。

また、避難所運営委員会を立ち上げるにあたり、町会長の役割を運営リーダーから町会の安否確認に徹するように変更した。

⑵　いきいき部会のサロン化推進によって、新村地区１４町会のうち１０町会がサロンの立ち上げにまで至った。（２８年度３町会、２９年度７町会）

⑶　今まで一度もふれあい健康教室に参加したことのなかった方が、嚥下の講座に興味を持ち、足を運ぶ機会となった。

⑷　できることもちよりワークショップの要素を含んだケース会議を民生委員中心に開催することができた。民生委員の情報共有を目指している。

本部からの指示を受ける大学生

民生委員とケース会議

４　２年間を振り返って

１年目は地区の活動に協力することが多く、大学との橋渡し役は十分と言えなかった。しかし、関わる団体の会長たちがやる気に満ちた方ばかりであったことが幸いし、地区の情報や歴史、意欲的な住民の方を紹介していただく機会は多かった。また、新村の地域づくりセンターは建物内に出張所、公民館、福祉ひろばが一緒に入っているため、情報共有を行いやすく、部会へ提案をしたり、地区内の団体への協力依頼を行ったりと、連携が取りやすかった。

２年目に入る平成２９年４月に、同じ二期生であり芳川地区のインターンの伊藤と協力し、嚥下についての講座を開催できたことはいい経験だった。企画、準備、全てを自身で試みることは大変で、まともな資料も用意できなかったた

め、いつもの賑やかなふれあい健康教室とは違ったが、嚥下というテーマだったからなのか、今までふれあい健康教室に参加したことのない方がお見えになったことは大変嬉しかった。

インターンとしての任期はあと１年で、きっとあっという間に終わるだろう。まるで自分の手柄のように記したが、新村地区はやる気に溢れる方が多いからこそできたことばかりである。インターンという存在が地域活動に一石を投じるきっかけにはなったかもしれない。しかし、これがいわゆる打ち上げ花火で終わらないよう、従来の活動をパワーアップし、住民の地域づくりへの関心も高めていきたいと考えている。

松本市地域づくりインターンシップ戦略事業に携わって

芳川地区担当　　伊藤　実沙子

1　芳川地区の概要及び地域課題

人口 16,902 人、高齢化率は 22.1%で松本市平均 27.3%より低く、子どもの割合 18.3%は、平均 17.3%より高く若い世代が多い地区である。また、平成 28 年は 203 名、平成 29 年 10 月時点で 181 名の新生児が誕生するなど、人口は 5 年連続で増加している。

地区内には、JR 平田駅、村井駅があり、国道 19 号が通り、塩尻北 IC が近く、交通の要所として機能している。

商業施設、教育施設、医療機能が充実しており、交通の便も良いことから新規住宅の建設も盛んである。また、子育てについては、「こんにちは赤ちゃん事業」からはじまり、公民館、福祉ひろばにおいてもサポート事業をしていることから安心して子育てができる環境も整っている。

課題としては、新旧住民が混住し、成熟した地域のコミュニティーの形成が難しく、住民同士のつながりの希薄化が見られるものの、構成する 8 町会が異なる特色を持っているため、それぞれの色を活かせる地域づくりにしていきたい。

2　インターンとして取り組んだ事業

初年度より、小学生向けのキッズクッキングや公民館事業の未就園親子向けの食育学級、福祉ひろばの男性の料理教室など、食をツールとして、地域住民に関わってきた。今までは“地区”としての活動が多く行ってきたが、より身近なコミュニティの絆を深めたいと考え、“町会”単位で、どのような人でも気軽に来られて、交流がもてるような事業も考えている。食事を一緒に作って、同じ食卓を囲むということを通して世代を超えた関わりをもてるようなことも少しずつ進めていく予定だ。

写真 1：キッズクッキング①

写真 2：キッズクッキング②

写真３：食育学級

写真４：男性の料理教室

写真５：平田でごはん（肉まん作り）①

写真６：平田でごはん（肉まん作り）②

３　事業の成果

キッズクッキングでは、食への関心を持ち、自ら考えて行動できる子どもの育成を目的に行ってた。上級生が下級生に教えたり、“ひとりでやってみる”という経験ができて子どもたちのキラキラした姿を見ることができた。また、食育学級では、食農教育として土をいじりながら、野菜を育てて、口に入るまでの一貫性を持った活動で、親子そろって体験できるため好評で、口コミで年々参加者が増えている。共通して「家でも同じものを作ってみたよ」と日常生活においても実践につながっていると感じている。また、参加者同士の交流の場にもなっているため、そこで知り合いが増えることにより、別の機会でも話せるきっかけにもなっていると感じている。

各町会での実施を考えている「〇〇ごはん」、第１回は平田町会で実施した。参加者としては、６０～７０代のシニア世代の方が多く、小さなお子さん連れのご家族も参加していた。ベテラン主婦が多く、子どもや若いお母さんにつくり方を教えている姿を見ることができた。また、体験したことを、家で孫と一緒に作ってみたいという意見や、みんなでわいわいがやがや楽しく交流ができたようだった。課題として、同じ顔ぶれが多かったので、周知方法の改善などしながら、普段関わらない人たちも参加できるように工夫もしていく必要があると感じている。

４　２年間を振り返って

芳川地区に関わらせてもらう中で、温かな人柄の方が多く、挑戦しようとすることを応援してくれる環境で活動できており、感謝の気持ちでいっぱいである。２年間、“食”で地域をつなぐということでやってきたが、地区の方々との関わりの中で、自分にはない視点の気づきがあった。また、経験豊富な人生の先輩方の知識や知恵を教えてもらうことは、自分にとって活動の活力となっている。いただいたアドバイスを自分の活動に反映させながら、更なる充実化に励んでいこうと考えている。また、自分のやってきたことを残していくための仕組みづくりや、地区の方がやりたいと思っていることに対してサポートできるように、自分自身を高めて地区の発展に貢献できるようにしていきたい。